

1. はじめに

私は、2020 年に関西大学を卒業後、同年に大阪大学大学院高等司法研究科に進学しました。2022 年に同大学院を修了するとともに、同年の司法試験に合格致しました。司法試験に合格するまで、先生方、学校関係者の方、先輩方、同期の友人、後輩の皆さん、家族に支えて頂きました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

僭越ながら、本稿においては、大学時代から合格に至るまでの過程を記載します。これから司法試験を受験される皆様にとって、何か参考になるものがあれば幸いです。ただ、後述するように、私の合格については運の要素が人よりも強いと思われます。

2. 大学時代

大学時代は何の計画性もなく、「今しかできない」を掲げて勉強以外の多くの活動を行っておりました。体育会・サークルに所属してほぼ毎日活動し、休日も様々なアルバイトをして、特に勉強せず日々を楽しく過ごしていました。

法曹を目指すなら、いよいよ勉強しなければと勉強を始めたのは大学 3 年生の頃です。民法のみの字も知らず、「物権」と「債権」の違いを知って嬉しくなり、先輩に誇らしげに話しては、「1 年で習うようなことを自慢げに話している」とからかわれていた頃です。

私が始めた勉強は、単純かつ愚かなものでした。「司法試験を理解すれば合格できる」と思い、いきなり司法試験の短答・論文の問題と解説を購入して読み始めました。さらに、長期休みを利用して地方の住みこみアルバイトを入れ、1 か月間、アルバイトと司法試験の問題解説を読むことしかできない環境にしました。行動力だけが強い所業でした。

案の定、1 か月の成果は、「法律って難しいなあ」と浅い感想を得て終わりました。

司法試験を合格して振り返った今、この上ない無駄な時間を過ごしていたなと思います。膨大な基礎知識があるからこそ理解できる法律の文章を、何も知らずに勢いで読んでいるからです。参考書の初めの辺りを読んでいて眠くなっても、まずは諾成契約や要物契約といった初歩の初歩からコツコツ勉強すべきでした。その契約の類型を知っているからこそ、後に勉強することとなる要件事実などの理解も深まります。文章として記されている言葉だけでなく、書かれていない前提知識を踏まえて理解し、勉強しているからこそ、張りぼてにならない太刀打ちできる知識の蓄積になると今は思います。

さて、1 か月の自主勉強合宿を終え、流石に当時の私もいきなり司法試験に挑むのは意味がないと気づき、判例を読んだり、演習本を活用したり、先生方や先輩、同期に質問しておりました。しかし、この段階では、ロー入試に間に合わせるためにと「知識の丸覚え」をしてしまっており、あまり理論や理屈を考えずに勉強しておりました。

結果、法科大学院の入試では、大阪大学法科大学院に補欠合格で入学するなど、大学院生としてのスタートはあまり良くありませんでした。ただ、最下位からのスタートなので、伸

びしろしかなく、上がるしかないなという前向きさがありました。

3. 大学院時代

大学院 1 年目は、よく入学できたねと友人に笑われてしまうほどに、法律の理解が甘かったです。例えば、刑事裁判で証人が証言台で発言しても、その後に供述不能にならなければ、どんな場合でも証拠として認められないと本気で思っていました。丸覚え勉強だったので、全く趣旨を理解できていなかったのです。

色んな分野で、参考書を読み返し、理解できなかったことは先生のもとに質問に行きました。その度に、そういう意味だったのか、と沢山のことを理解でき、とても楽しかったです。根気強く説明してくださった先生方にはとてもお世話になりました。

阪大ローでは、授業課題について優秀答案を公開している授業がいくつかあったので、‘学ぶ’の語源である‘真似る’をしようと、優秀答案の分析を行っていました。そこで、問題提起、規範、あてはめが忠実にされていることに気付きます。理路整然と表現する三段論法の重要性を学びました。これまでは、どんな形であれ、いわゆる論点を書けておけば理解を示せるんだろうと甘く考えておりました。後に、先生方が「答案は問題提起で決まる、問題提起で理解しているかが分かる」と仰った際には目から鱗が落ちました。そこから、判例や答案を読む際には、問題提起、規範、あてはめを色分けして読み、「分かる」ために「分けて」考えていきました。我ながら、よく入学できたなと自分が強運に思います。

徐々に知識も書き方も定着してきたかと思っていた大学院 2 年目、刑事系科目の中間テストで最下位を取ります。模試では、憲法でほぼ最下位を取ります。もともと丸覚えだったので、勘違いして覚えていたり、間違えて理解してそのまま進んできたことが多かったのです。

色々とおぼつかない私でしたが、丸覚えをやめて基礎から地道に理解し直したり、優秀答案を真似たり、適切な時期に過去問を回し始めたり、勉強量が多すぎて理解が難しくて家で泣きながら勉強したりするなどした結果、最下位からのスタートでしたが、特待生になって卒業することが出来ました。

4. 試験直前期

最下位を取った悔しさは、「二度とその問題においては失敗しないぞ」という気概を私に与えてくれました。阪大ロー入試の刑法と刑事系科目の中間テストは特別なもので、自分としては勉強したはずなのに全く書けなかったという悔しさが特にありました。そのため、通常の勉強に加え、司法試験で出題されたら完璧に書いてやると思い、少し力を入れて勉強しておりました。そのまさかでした。

5. 試験当日

精神的に追い詰められる中、先生方や友人に掛けてもらった言葉を思い出しながら、なんとか 1 日目、2 日目をこなしました。

迎えた論文式試験の刑事系。1日目2日目同様、分かる問題が出てくれ、と祈りながら問題を開くと、そこには私が最下位をとった問題分野が2つとも試験に出題されていました。運が味方になってくれたとしか思えません。山が的中した際の注意は、書きすぎるが故の時間切れであることを思い出し、何を書き、何を書かないか冷静に判断して書ききりました。試験後、試験の邪魔になると抑えていた全ての感情を吐き出しました。一番果たしたい形でリベンジを果たせたことが、とても嬉しかったです。

6. おわりに

私は随分と遠回りの勉強をしていました。初めから基礎からコツコツと勉強すればよかったものの、知識量の少なさに焦り、何とかロー入試に間に合わせるように丸覚えをしました。その後、太刀打ちできない現実を知り、司法試験で戦えるよう一から理解し直しました。自分の理解力や到達レベル、自分が継続できる集中時間や性格、特質にあった勉強法を自分で見つける努力を大学院に入るまで怠っていません。

これらの反省が、これから受験する皆さまに少しでも参考になれば幸いです。と同時に、私のような、大学院入学時にほぼ何も分かっていない者が、合格していることに少しでも希望を抱いていただけたのであれば幸いです。

ここまで読んでいただき、ありがとうございました。合格に辿り着くことができましたのは、本当に素晴らしい方々に出会い、支えて頂いたからだ実感します。学業だけでなく、精神的にも支えて頂いたすべての方々に心から感謝申し上げます。

今後は、社会に少しでも貢献することができる法曹になるべく、自己研鑽に励み、より精進していく所存でございます。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。